

中ソ和解と日本の立場

東京外国語大学教授 中 嶋 嶺 雄

1

最近の中ソ和解という動向については、二、三年前までは到底考えられなかったことだと思う。

その中ソ関係がいよいよ動き始めていることは周知の通りであるが、いったいこの中ソ関係が今後どの程度まで進展するのであろうか。それに伴って、従来中ソ対立というものを非常に固定的に絶対変化はないといった限定の下で、兎角考えてきた西側諸国、アメリカ、そして日本にとって、安全保障あるいは外交上にもいろいろな問題の出てくる可能性がある。

私は従来から中ソ関係をそのように固定的に考えてはいけないうことを主張してきた。それは何故かという点、特に専門に中国内政のこのところの変化を冷静に見てみると、その変化の先に浮んでくるのが中国の対ソ認識の変化であって、従来の毛沢東時代と根本的に違った見方が出てきており、それに伴っていろいろな人事的変化も起

ってきている。そして今や毛沢東時代も完全に消え去り、中ソ対立の要因も基本的に消えてしまっている。

こうなってくると、当面はやはり共に社会主義国家としてあるいは共産主義者としての共通の目標がだんだん浮びあがってくるのではないかと思うわけで、私はそのことを繰り返して言ってきたわけであるが、なかなか納得してもらえなかった。

従来中ソが和解する筈はないという雰囲気は非常に強かったし、わが国の政府・外務省は今日に至ってもあるいは最近の鈴木訪中に際しても明かなように、中ソ和解はあり得ないという基本的な立場を依然として固持し続けてきている。そして最近ここまで動きが出てくると、今度は仮りに和解しても大したことはないだろうというふうに言っている。

何れにしても中ソの和解という将来の問題は、いわば仮定の問題であり、展望の問題であるの

で、中ソ和解をどのように考えるかという定議をある程度明確にしておかないと水かけ論になる可能性がある。

私自身も中国あるいはソ連を研究し、ロシア民族と漢民族が永遠に兄弟のような友好を誇り得るというようなことを言っているわけではなく、ソ連と中国という巨大な民族国家がユーラシア大陸にお互に対峙していること自体をとっても、なかなか両国の関係というものは難しいと思う。

しかしながら共に社会主義国家としてあるいは共産党政権としての共通性という点で問題が出てきた時、例えば安全保障の問題とか、あるいは外交政策、あるいは今後社会主義の中で起るであろうところのポランド化現象と称するような社会主義から離脱しようとする動きというものを共に抑えていくというようなことから共通口が出てくることを問題にしているのだ。仮りに日本が今後防衛力を増強しようとするれば、中ソ両国が一緒にあってそれを批判するというように、いわば共産党国家としての政策的なレベルでの一体感というものが出てきた時、私はそれを中ソ和解というふうにいふわけであって、私の言っているのはそういったレベルのことであるし、またわれわれは当面そのことを問題にすればよいし、すべきであろうと思う。いわば何百年来のロシア民族と漢民族間のことを今更言っても仕様のないことである。

そして当然ながらそういう共産党国家であるから党と党との間が改善されれば、それは政府間の外交関係までは直ちに変化し得るというふうな考

えてよいわけである。

そこで私は中ソ和解というものが只今のべたような極めて戦略的なレベルに、中ソの世界戦略あるいは共産党国家としての対外政策というレベルにおいても、だんだん一致し得る側面が出てくるのではないかということを言っているわけであるが、その根拠をこれからいろいろな形でお話してみたいと思う。

2

先ずもしも今の中国が依然として毛沢東時代であったならば、あるいは毛沢東路線を継承する人たちが権力を取っていたならば、絶対に中ソ和解はあり得ないと思う。ところが今は毛沢東の政策を外内に亘って根本的に否定する立場の人たちが天下を取っている。それに今の鄧小平、胡耀邦体制が直ちに転覆するようなものであれば、また再び華国鋒のように毛沢東思想を継承するリーダーたちが出てくれば、中ソ和解といっても中国側にはそのような条件はないと思うけれども、私の見る限りでは今日の鄧小平、胡耀邦型のリーダーシップは可成り強いのではないか、ここがポイントであろうと思う。この強いというのは問題がないということではなくて、少くともそれを覆えすだけの組織的な反対勢力は、今の中国共産党内には求め得ないと思う。

あれ程の激動を繰り返えし、そしてある意味ではもう二度と文化大革命のような激動を繰り返えすことは止めようというある種の凝集力、ある種

の合意もあるわけであるから、それをね除けてまで今の鄧小平、胡耀邦型の非常に組織的、制度的にいわば党官僚独裁体制―赤い貴族の独裁体制が強化されつつあるリーダーシップを覆えすということは可成り困難であろうと思うし、もしそうなるならば中国は滅茶々々にならざるを得ない。そうならないためにも現在の中国のリーダーたちは必死になっているといってもよいと思う。

今日の中国のリーダーシップをみるには、やはり九月の中国共産党第十二回党大会をどう評価するかということから始めなければならないと思う。日本の新聞は教科書問題でいろいろ賑かであっただけに、この党大会についてもいろいろ報じられたけれども、私とは基本的に見方が違っており、私は新聞の見方とは百八十度違った見方をせざるを得なかった。何故ならば、多くの新聞は今回の十二全大会を見て、鄧小平路線には大きな抵抗があり、鄧小平の思い通りにいかなかったというふうな書き方をしていた。そして例えば葉劍英といった長老が留任したことも、これは鄧小平の思惑が外れたんだとか、また華国鋒や汪東興の名前が一応残ったことも文革派の抵抗がまだ強いからだというふうな書き方をしていたと思う。果してそうであろうか。私はそうは見ない。寧ろ十二全大会は鄧小平にとって非常に満足のゆく大会ではなかったか。それはこの十二回党大会、それからつい最近閉幕したばかりの全国人民代表大会をみても、寧ろ鄧小平にとっては着々とその政治的敷石が施かれた重要なステップではなかつ

たかと思う。

鄧小平がもしもこの九月の時点ですべて目的を達するんだという見方に立てば、確かにまだまだ鄧小平の思い通りにならなかったというふうなところもあると思うが、鄧小平という人は、私がかねがねいうように、今から五年前の一九七七年にあの奇跡的な二度目の復活を成し遂げた時、自分の身体は今後八年から十年位までは大丈夫だといっていた。彼が少くともそういった時間について発言する場合は、「チャンスは二度と来ない」といった時間的感覚でみて自分の余生、年令などを勘案して、その間に為さねばならない課題を充分考えた上で言ったことと想われる。したがって、それだけの使命感を持っているからこそ一九八五年から八十七年位までが彼のターゲットだと思う。彼はそこまでやって自分が引退するなり、天寿を全うするというふうに考えているのではないか。そうするとまだ後三年から五年位ある。この間に鄧小平の考えていることは恐らく中国社会全般の非毛沢東化だと思う。

そして先づ考えられるポイントは一九七八年の三中全会であって、今でもこの三中全会の精神が強調されるのは何故かというところ、それは正に鄧小平のリーダーシップが党中央においてほぼ固まったわけであり、それから八一年の六中全会はいわば鄧小平型のリーダーシップによる非毛沢東化、毛沢東批判、人民公社批判等を含んだ問題を歴史問題の決議として党中央で採択、つまり文章において非毛沢東化を実現したわけである。それから

今度の十二全大会では先づ書記処というものを非常に鞏固にし、党規約も改正し、主席制も止めて総書記制にしたことである。

アンドロポフが今回ソ連で後継者になった一つの大きな基盤は彼が十五年ぶりに書記局に入ったことだったと思うけれども、中国共産党の場合、文革前までは鄧小平が総書記であった。文革発動以後活動を停止、文革終結後再建され、そして今回胡耀邦が総書記になって文革前までの体制に復帰したわけであって、正にその点でも党機構がソ連共産党にかなり似てきたわけである。

このように制度的に固めると同時に、更に人事的にも鄧小平の息のかかった人たちが鄧小平が最も信頼する胡耀邦系列の人たち、中国共産主義青年団（共青団）のグループ等を全部書記処に入れた。今回の書記処の人事の中で特に注目すべきことは、胡耀邦を総元締として長老の中では万里が注目される。その他は正に文革以来中国で一ばん悪い奴だというふうに批判された四家店の一人楊尚昆とか、上海の劉少奇の代理人といわれた陳丕顯等劉少奇の黒い一味といわれた人たちが書記処に入っていることである。

曾て共産党の役職に就くためには長征を体験しているかどうかということが大きな問題であって、長征に参加したということは彼等の革命的な資産であると同時に経歴上にも非常に有利であったわけであるが、現在ではそういった長征に参加した人たちは己に七〇—八〇才という高齢になっているので、やはり中国共産党の中では建国後共

産主義青年団の幹部であった人たちがいわば長征に参加した人たちと同様に中国共産党のエリートになりつつあるわけである。胡耀邦は正にその一人である。

それから私が特に注目すべき人材として挙げている人物に胡啓立がいる。彼は一九二九年生れの五三歳で、書記処書記中とび抜けて若年である。彼は北京大学の機械系を卒業しており、中国全学連の委員長であったり、またブラハに本部のあった国際学連の中国代表であった。また彼は新民主主義青年団、中国共産主義青年団の出身であるが、その後劉少奇の一味として徹底的に批判されて消息を絶ったけれども、つい最近復活すると同時にとんとん拍子に昇進して今では党中央の書記になっている。少くとも胡啓立に関しては鄧小平、胡耀邦体制の続く限り、いよいよ出るべき人物が出てきたという感じがする。

こういう点からみると、仮りに彼等が来日して経済界あるいは外務省あたりに接待されてもそう簡単に喜ぶような人ではなく、やはり極めてしたかな人物で社会主義に徹した人たちであろうと思う。

こういう人たちを中心に書記処を固めたわけであるから政治局は特定の人物以外は動かす必要はなかった。つまり書記処を機能的に強化し、そこにすべて反毛沢東派の人物を入れて政治局を動かさなかったところに鄧小平の人事の妙があると思う。

一方、華国鋒、汪東興という文革派がまだその

名を残しているけれども、これはとても文革派の抵抗などというものではない。華国鋒にしても、曾て№・1であったものが二〇〇位以下の平の中央委員に降されたのだから、これは日本でいえば切腹ものであり、また汪東興の場合にしても曾ては政治局常務委員の№・4であったものが中央委員候補の最下位にまで落として置きながら尚名前を出して置くということは正に生き恥をかかせるということであって、残存文革派に対するみせしめだと思う。というのは党員三千九百万人の半半分は文革時の入党者で、彼等は文革期間「造反有理」を掲げ、毛沢東語録を振りかざして、現在書記処入りしているような人たちを黒い一味として打倒した、その功績が認められて党員になった人たちである。

そういう人たちはもちろん党中央からは一掃されたけれども、まだ地方レベル特に末端の県級には沢山いるわけである。

それから中国社会における一般中国人は、これまでずっと激動の繰り返しを見てきただけに、鄧小平が死去したらまた崩潰するのではないかというふうに感ずるのも当然である。鄧小平が死んだらまた会おうというような言葉が囁かれているということであるけれども、それだけに鄧小平としてもあれだけの激動をかくぐって奇跡的な復活を何回となく成し遂げてきているわけであるから、自分亡き後どうなるか分らないという不安がやはり非常に強いと思う。あの暗黒の毛沢東時代が再来しないようにするには、正に現在尚残存し

ているいわば文革派を根こそぎ追放するというところにならざるを得ない。それを今やろうとしているのが中国版の行政改革—庚申改革のアイデアであり、それを最近ではまた整風運動としてやるというのである。

このようにみると、少くとも現在の中国共産党の方向というものがほぼ分ると思うけれども、これを一口でいえば赤い貴族の独裁体制であって、そういう党官僚独裁体制がますます強化されつつあるというのが今日の中国ではないかと思う。

そして恐らく今後三年乃至五年という時間の中でやり遂げてゆくのではないかという気がするわけである。もちろんその間、四つの現代化がもう少しうまくかなければその責任をとられるという問題もあるけれども、その結果は今世紀末にならないと出ないわけであるから、当面鄧小平にとって重要なのは、長期的国家目標としての四つの現代化であっても、ここまでやり始めた非毛沢東化を中途半端で終らされることは最も危険だということに考えていると思う。

さてこのように中国の政治が内部的に転換してくると只今のべたように鄧小平、胡耀邦、万里等が最高の実力者であって、私は趙紫陽をあまり高く評価していない。彼は御祝儀外交に出てくる人材ではあっても、あまり力がないと思う。先般鈴木総理が訪中した時は趙紫陽が出てきたけれども、北鮮の金日成が訪中した時は趙紫陽ではなく、鄧小平、胡耀邦といったトップクラスが出てきている。これがいわゆるラインだと思う。フランス

共産党のマルシェ書記長が訪中した場合もやはり鄧小平や胡耀邦が出てきて「従来のやり方は誤っていた」といって和解した。恐らく日本の共産党との間にもそういう形での和解がやがて実現するのではないかとみられる。

イギリスのサッチャー首相が北京に行った時も確か鄧小平や胡耀邦等が非常に重視したが、サッチャー女史も大したもの、あのアヘン戦争の結果結ばれた南京条約、北京条約、それからその後の香港九竜拡張条約などを今日に至るも国際的には有効であると言いつ張ってくるわけであるから、その度胸たるや大したものである。

ところがわが国のリーダーはどうか、不必要なまでにさんざん頭を下げて、「わが国は軍国主義ではない」という有様であるから、それには趙紫陽を出してちよっと御祝儀外交をやっておけばよいということ、中国側も相手をよく見て対応していると思う。

3

さてそういう中国の変化の中で、中ソ和解に関する中国内部からの条件が出てきていることを明確にするため、これまでの中国の政治構図をもう一度考えてみたいと思う。

現在天下を取っている人たちは、もし毛沢東が在世しているならば、絶対に表面に出られなかった人たちである。もし今毛沢東時代であるか、あるいは毛沢東派の華国鋒などが全面的にリーダーシップを発揮しているならば、鄧小平にしても胡

耀邦にしても、今頃は北京郊外の監獄にぶち込まれているか、あるいは黒竜江省あたりの労働収容所で働かされているかもしれない立場の人である。したがって、それらの人たちが現在全面的にリーダーシップをとっているということは、只単に毛沢東政治の否定だけでは済まされない問題があるわけであって、政治というものはいわば一つの弾みというか、反動を伴うものである。

中ソ関係にしても今日まであまりにも悪過ぎたためにやはりその弾みで、現在中国ではソ連に対するバラ色の論調が盛んに出はじめている。例えばソ連にはインフレがないとか、物価が安定しているとか、あるいは計画経済が非常にうまくいっているといったようにソ連の人たちが聞いたら内心世に妬むものがあるのではないかとさえ思う。評価が出はじめているほどで、最近ソ連に対する評価が非常に高まっている。これもやはり一つの反動であろうと思う。

そこで今や毛沢東は否定され、結局曾ての劉鄧実権派がいま天下を取っているが、最近毛沢東路線と劉鄧実権派の間に立っていた周恩来の立場が微妙に揺れ始め、国内ではあまり周恩来ということとを言わなくなっている。

私はこれは当然だと思う。それは何故か、私は曾て北京で挙行された孫文生誕百周年記念式典の現場に出たことがある。周恩来は文革の開幕に当たって毛沢東語録を打ち振って、毛沢東万歳を叫んでいた。「孫文先生のように、革命家にとって大事なことは晩節である。それに引きかえわれわれの

周辺には晩年になって毛主席に叛く輩がいる。彼等には末路がないのだ」と叫んで毛沢東万歳を称えた。その時壇上にいた劉少奇は蒼白となり、禁煙にも拘らず煙草を吸い始めた。また鄧小平は今にみていろいろ感じて周恩来を睨みつけていたのをはつきり目撃している。私は周恩来ともあろう者が何故にあのように毛沢東万歳を称えるのだろうか、と巷間の評価とは可成り違った印象を受けた。もちろん周恩来には彼自身の深謀遠慮で毛沢東万歳を称えたのかも知れない。結局晩年になってこれでは駄目だということに気づき、彼もまた毛沢東体制下の非毛沢東化を図ったわけで、それが露見して晩年に攻撃を受けたわけである。あの水滸伝批判などもそうであった。このことに気づいた民衆が周恩来の死を悼む献花を抑圧したのがあの天安門事件である。

兎に角文革に賭けたということにかんしては、周恩来の立場には決定的な汚点がある。劉鄧実権派からみれば、文革によってあれほどの悲劇を生み、中国を滅茶々にしてしまつたとするならば、あの時周恩来がもう少し毅然たる態度をとっていたならば中国はあのようなことにはならなかつたという批判が当然出てくるわけである。したがって周恩来に対する過信ということから評価が低下すると同時に、周恩来系列のリーダー、葉劍英、李先念等の影響力がなくなってくるのも当然のことだと思ふ。

それからこれもやはり反動というか、もう一つのグループがある。実権派は大躍進政策が失敗し

てから毛沢東と対立したわけであるけれども、そもそも以前から人民公社とか大躍進などをやれば中国の農村は滅茶々々になるぞといつて党中央に意見書を突きつけ、同じ湖南省出身で同郷人として毛沢東に切々と訴えた手紙を出したのが彭徳懷である。彼は一九五九年の廬山会議においても毛沢東と痛烈に罵り合っている。その彭徳懷が今や中国では非常な人気を博している。

最近毛沢東撰集を出している最も権威のある人民出版社から『彭徳懷自伝』が出版され、その付録として毛沢東に宛てた手紙がついており、しかも今これが中国ではベストセラーになっている。

今や旧実権派が天下を取っているだけに彭徳懷が評価されるのは当然である。そしてそれは毛沢東に対するアンチテーゼという意味もあるが、周恩来と比べると彭徳懷は非常に不幸な死に方をしている。即ち彼は文革中に紅衛兵に殺害されるような形で死んでいったわけであり、しかも彼は根本的に毛沢東批判者であつたということから、毛沢東を否定した今日ではこの彭徳懷路線が評価され、しかも彭徳懷勢力の人たちが殆ど復活しているのもこれまた当然であらう。

さてもう一つの反動として高崗グループの復活がある。高崗は一九四九年の建国の時には党内No.4の序列で天安門の樓上に姿を現わしているが、彼は当時の中央人民政府の副主席であつたけれども一方ではその後の人事に不満を持っていたようである。

しかし彼は東北では非常に権力を持っており東

北王ともいわれた。建国前の四九年七月は己に北京は共産党支配下にあつたわけであるが、彼は党中央とは全く別個にスターリンと交渉して通商貿易協定を結んでいた。それはソ連と中国との通商貿易協定ではなく、ソ連と東北との通商協定であつた。フルシチョフの回想録の中にも高崗とスターリンとの親密な関係であつたことが出てくる

が、結論として言えることは、高崗が人事的にも不満があつたが故に彼は中国にとってひととき経済的基盤の高い東北、重工業地帯の東北を基盤として自己の権力を鞏固しようとした。その高崗の胸中に気づいたスターリンがこれまた高崗を大いに利用しようとしたと思われる。そもそもスターリンの考えたことは、ヤルタ体制後、東欧諸国はいわゆる人民々々主義という名の下に傀儡政権を作つていったことに現われている。だからこそスターリン批判後にハンガリー事件やポーランド事件が起きたわけであるけれども、一方極東に対しても同様なことを考えた。そして北朝鮮に金日成を送り込み、中国にも李立三を哈爾濱に送り込んだ。李立三とは李立三路線といわれたほどの指導者であつたが、彼はやはり土着でないで現地に基盤がない。さらに一九七四年にモスクワで客死した王明にも期待したがそれも駄目であつた。そこでスターリンはすでに東北に基盤を築いていた高崗に着目したわけであるから、これは大変な出来事であつたと思ふ。

後に毛沢東は『毛沢東思想万歳』の中で「高崗事件は中国共産党にとって震度8の大地震であつ

た」とのべている。

一九五四年にこの高崗事件が摘発され、翌五五年には「高崗、饒漱石の反党同盟に関する決議」が採択された。高崗は獄中で自殺したというふうな『人民日報』にも出ている。彼等の罪状は独立王国を作ろうとした反党反革命分子ということであつたけれども、そこにはいまのべたような隠された背景のあつた事件であるだけに非常に深刻であつたと思う。当時の中国共産党東北ビューローの重鎮、東北人民政府の重要幹部は高崗事件の発覚と同時に悉く芋蔓式に連座摘発されて党を追われたが、意外にも一昨年の秋頃からそれらの幹部たちが次々復活して東北の要衝を握っている。例えば遼寧省の最高権力者は曾て高崗の側近であつた郭峰であり、ソ連に接する黒竜江省の省長は趙德尊、十二全大会に出てきた張香山、胡喬木に代つて社会科学院長になつた馬洪等、これらの人は曾ては同じ釜の飯を食べ、芋蔓式に摘発されて同様に失脚した人たちである。これらの人たちが全部出てきただけでなく、再び東北の要衝のリーダーになつていくことの意味は極めて重要だと思ふ。

以上から今では毛沢東と周恩来と劉少奇と鄧小平と胡耀邦と彭德懷と高崗といったシフトが生まれてきているというふうに考えられる。

現在の鄧小平は、少くとも毛沢東のようにソ連と全面的に対決するんだとか、アメリカ帝国主義を打倒するためには先づソ連を打倒すべきであるというような考え方は根本的に違うわけで、こ

れが先づ最近の中ソ和解というものが単にアメリカを睨んでカードを弄ぶということだけでなく、寧ろ内部的にそういった変化が出てきている点をもっと掘り下げてみておく必要があるかと思う。

4

これに加えてもう一つ最近の変化として挙げられることは、——私はそれを「知ソ派」といつているが、ソ連体験者、ロシア語サービス、ロシア語世代の人びとの著しい抬頭である。例えば鄧小平自身も周恩来と一緒にフランスに留学したその帰りにモスクワに留まつて孫逸仙大学に入つており、ソ連留学の体験がある。勿論ソ連に留学したからといつてソ連が好きになるとは限らないけれども、少くとも毛沢東などとは対照認識が違い、いわば知ソ派である。そしてソ連の歴史に新しい時代が始まつた頃の水を飲んで育つてきているのである。

今度の外交部長は黄華に代つて呉学謙がなつたけれども、黄華は燕京大学の出身で、曾ての米駐華大使ジョン・レイトン・スチュワートの教え子で、一九四九年に南京を舞台にアメリカとの接衝に當つていたその時の中国共産党外事系の責任者であつた。つまり黄華は正に米中接近時代の外交部長としては最適任者である。ところが今や中ソ和解の方向がいろいろ出てきたので黄華に代つて共青國際派の呉学謙が外交部長になつた。呉学謙の英語はアメリカで習得したものではなく、正にプラハの國際学連とか、中ソ友好時代の民主青年

運動のため必要な限りについて習つた英語であつて、そういったタイプの人たちが最近出てきたことも印象的である。

それから国防部長は対米接近派の耿飈に代つて張愛萍がなつた。彼は曾て彭德懷の部下で元副総参謀長であつた。

このように知ソ派のリーダーたち、ロシア語サービス、曾てはロシア語ができるという和白い目でみられた五、六〇代の人たちが一斉に出てきた感じである。

こういう情況の中で呉学謙が外交部長になるとともに次官級には銭其琛という人がいる。彼は現在五〇代で、曾てモスクワ中国大使館の政務担当書記官を長くつとめたことのあるロシア語に堪能な人物である。彼は去年の三月、ブレジネフがタシケントで中ソ和解の呼びかけを行った時、それを中国側で受けとめた新聞局長いわゆるスポークスマンであつた。

そのブレジネフの呼びかけを新華社を通じて全中国に流した責任者は彼であつた。また『参考消息』という内部刊行物の新聞を通じてブレジネフ演説の全文を幹部に回している。

私はその時ブレジネフ演説に非常に注目してその内容をみたが実によくできていると思つた。例えば「中ソ間には友好の絆に結ばれた時代があつたではないか。われわれは二つの中国という陰謀に一度も加わつたことはないのだ。われわれは同じ社会主義者の絆でもう一度世界を作り直すのではないか」というようなことを言っている。また

その中で非常に満足している感じの出ているのは、鄧小平指導部に向って「よくやってくれた、よく毛沢東路線から離脱してくれた」というようなニュアンスがありありと出ている。

さらに特にソ連側を満足させたであろうことは、その間、中国がポーランドの連帯運動を完全に冷たく見放したことである。ソ連にとってポーランドの連帯を認めるかどうかは正に自己のレゾ・デ・テールに関わる根本問題であるだけに非常に重要な踏絵だと思う。ご承知のようにポーランドの連帯は日本やレーガン政権にもシェアを求めてきたわけであるから、あれ程ソ連を悪くいついた中国共産党にも当然支援を求めたけれども、中国共産党はそれを冷たく見放したのみならず、ヤルゼルスキー軍政権と通商協定を結んだりして、連帯つぶしに加担したわけである。そして「ポーランド問題について」という中国の内部文獻には、ポーランドの二の舞を踏むべきではないという形で、西側におだてられて外資をどんどん導入し、借款を受け入れてしまったが故にポーランド経済は破綻したのだということが書かれている。こういうことはソ連が当然知っているわけであるから、演説の中にもその満足感が非常によく出ている。

これは今年の一月に日ソ定期協議が事務レベルで行われた時にもソ連側はそういうことを言っていたけれども、残念ながらわが外務省はその辺のセンスを読み取れなくて一蹴したようである。しかしブレジネフの内容を虚心坦懐に読んでみると

実によく出来ていると思う。これでは中国も動かざるを得ないような文面になっているのである。

そこで銭其琛は五月の國務院の改革で外交部副部長(次官)に昇進し、今回のイリチエフとの次官会談に出てきたわけである。そして九月の十二全大会では早くも中央委員候補に列せられるという実に著しい抬頭ぶりである。

この銭其琛の直ぐ下にいたのが于洪亮という人で、外交部のソ連・東欧局長だった。彼はこの八月にひそかにモスクワを訪れている。私はそれに注目して直ぐ『中央公論』の論文の中に彼のモスクワ訪問は非常に重要であると誓いたけれども、当時の日本の新聞も外務省も全く気づかなかったようである。

丁度その頃日本はどうであつたらうか。日本のマスコミは挙げて教科書問題で大騒ぎ、そして文部、外務の両局長が汗を拭き拭き北京詣で漸く面会できたのが尙向前であつた。彼は日中関係よく知られている人物であるが、残念ながら中国における政治的地位はあまり高くない。彼の最高ポストは外交部のアジア第一局長である。同じ外交部の局長でもソ連・東欧局長と比較すると、ソ連・東欧局長は党中央に結びつく人物になる。そこがやり共産国家の特徴である。

その頃漸く尙向前に会った両局長が、「日本は軍国主義にはなりません」といつて釈明していた時、中国は密かにソ連・東欧局長の于洪亮をモスクワに送っていたのである。

そもそも「日本軍国主義」批判は一九七〇年に

周恩来が十二年ぶりにピョンヤンに行った時、「日本軍国主義が復活した」と言ったのが始まりでわつと広がったわけで、従来アメリカ帝国主義

の打倒を叫び続けていた中国が、米中接近という手の裏を返すような転換をするには日本を叩く必要があつたのである。そのことによって中国外交の革命性を内外に誇示することが必要であつた。

一方、最近の中ソ接近への動きとともにもうソ連を覇権主義だともいわなくなつてきている。今回の全人代で採択された新憲法でも覇権主義という言葉は出ていない。勿論最も重要な規定であつた「社会帝国主義」という言葉も消えている。このようにいわば手の裏を返すような転換を平気でやつてのけるのが共産国家である。そういう転換の際に必要なのは外交の革命性を誇示することであつて、日本の教科書が侵略であろうがなかろうが、それは中国にとつては基本的にどうでもよいことであらう。

要は日本を叩くことが必要だつたのだ。そして日本が今後すこしでも防衛力を増強すれば、それ右傾化だという非難を浴びせるのではないか。そのことが今の中国にとつて必要なのである。正に于洪亮という人物が密かにモスクワを訪れていたことが重要なのであつて、それは単なる隠密外交としておわたつたのではなく、中ソ次官級会談となつて表面に現れた。

さて他方ソ連側はどうか、ソ連側も止に中国側に相当する人物が着々と地位を高めてきているといつてもよいと思う。その一人はソ連外務省極東

第一部長のカービッツァーで、彼は今度イリチョフに代って外務次官になった。彼は元来党中央に結びついたグロムイコ外相直属の極東第一部長で、極東第二部長は日本担当である。私は一九七〇年に科学アカデミーで招待された時、モスクワのレストラン・プラハでカービッツァーとさしで話し合ったことがあるが、彼は実にしたたかな人物である。彼はモスクワ大学の教授で、中国の政治と中ソ関係の専門家であって、中国語もよくできるし、ものすごくタフな人物である。彼はジョバロンの『KGB』という本によると、パキスタン大使の時に追放されている。ということになると、アンドロポフ政権下で彼が外務次官になり、しかもずっと中ソ関係をやってきている人物であるだけに極めて注目される人物である。中国側は黄華から呉学謙に代り、ソ連側はイリチョフからカービッツァーに代るといって正に好対照といえる。

それからもう一人はチフピンスキーという人物で、彼はソ連の中国学界の大御所である。彼もモスクワ大学の教授であると同時に外務省の顧問であり、中ソ国境のメンバーでもあった。このチフピンスキーはこの一月に三週間に亘って密かに北京を訪れ、曾てジュネーブでのワルシャワで始めてアメリカ側と接触したという中国人民対外友好協会長の王炳南と会ったりしていることがまた印象的である。私はこのチフピンスキーとも会ったことがあり、一九七〇年にモスクワ大学で国際歴史学会第十四回会議が開かれた時、壇上で彼と論

争したことがあるが、彼もやはり普通の学者ではない。何れにしてもこの二人に対する私の印象では、当時毛沢東時代であったということもあって、劉鄧実権派に対しては非常に同情的であった。チフピンスキーが三週間、カービッツァーが一年半の間に三回ほど北京を訪れているところからみて、恐らくこれらの人がブレジネフのタシケント提案の原案を書いたことはまず間違いないと思う。それだけに中ソ関係がそういうところから出てきているとするならば、私は来年は可成りの発展があるのではないかと思う。

それから例えば中ソ友好同盟条約が廃棄されたけれども、一九五〇年から五二年までに沢山の協定が結ばれているが、そういうものはまだ全部生きている。また、中国の機械設備の約六〇%、兵器の約八〇%はソ連モデルだといわれるように、何といっても相互に共通性がある。私は一九七五年と今年の二度、ソ連の裏側からモンゴルを経て北京に入ったが、裏側からみると社会主義の実態にはそれぞれ民族が違っても実に多くの共通性がある。例えばホテルのサービスの仕方、汽車や飛行機に一度乗りそこねたら何の情報もなく何時間でも放置されるという状態、社会のあらゆる断面の効率の悪さ、それから度しがたい官僚主義、等々、何れも非常によく似ている。そういう意味で最近ソ連に行つてその類似性に安堵する中国人が増え始めている。

中国側がそういう共通性に気づき始めたということはやはり重大であって、中ソ関係は可成りの

ところまでゆくであろうと思われる。また中ソ国境の軍事力にしても、お互いに無駄であるということが分っているわけであるから、よくいわれるようにモンゴルの国境にあれば多くのソ連兵が長期駐屯しておればモンゴルの反ソ感情も出てくるであろうし、将来大幅に減らす可能性も出てくるであろう。

中国の全人代でも明かなように国防費を削減しつつあり、国家予算も赤字であるし、現在の四二〇万の総兵員数を三〇〇万体制にしようというのが鄧小平の狙いであろう。こうした中ソ関係の変化によって中越関係などもいろいろ変ってくるであろう。

一方アフガニスタン問題などもソ連としては早く片付けたいという気持が強いようであるし、それよりもっと緊要なポーランド問題も安定させたいということであって、やはりアンドロポフという人は大変な人物で、ワレサの釈放などということとはヤルゼスキー政権だけでできるとは思えない。従つて来年は可成りの中ソ和解を契機に共産主義運動を含めていろいろな展開があるのではないかと思う。

5

さてそこで最後に日中関係はどうかということである。私はやはりこの十年間の日中関係は虚像の上に踊らされていた関係だと思ふ。われわれは中国に行けば中国の文物に接して感銘を受ける。それはそれでよいと思う。しかし万里の長城に登

つたり、秦の始皇帝の御陵を見物したりしても、それはすべて紀元前という古い時代の文物であって、現在の中国共産党政権とは全く関係がない。

それを同じ中国ということで錯覚してしまうわけであるから、やはり中国というものと中共政権というものをと峻別して考えていくべきであって、現在中国をリード、指導しているのは正に共産主義者であるということを忘れてはならないと思う。

中ソ対立というのは何もアメリカが伝統的に中ソ離間策を採ったことによって起ったのではなく、いわば共産圏の内輪喧嘩である。もし中国がアメリカの武器援助を受け入れてF-X戦闘機を導入するというならばそれでもよからう。ポーランドの連帯も認めるし、中国共産党の規約を根本的に改正して資本主義的な体制になるというならばともかく。そうではない。劉鄧実権派は今回の党規約のようにますます強面の社会主義政権になっていくわけで、正に赤い貴族であることに変わりはない。従って内輪喧嘩で夫婦別れをしていたけれども籍は抜けていないから、やはりよりが戻り得ることを考えておくべきである。やはり中国は極めて戦略的なコミュニストの国家であるということとを充分弁えた上でそれなりのつき合いをしていく必要がある。今考えてみると、われわれは敵の内輪喧嘩によって時間を稼いできたといえる。

だがお互いに社会主義者で共産主義者であるから将来一体化していくのは寧ろ当然であって、今後恐らくそういう時代がくるのではないか。私は

そういう意味では社会主義諸国は今後いわば対立していられないような状況が出てくると思う。それほど連連も中国も先行が暗いだけにお互いに国境に兵力を集結して内輪喧嘩をしている余裕がなくなる。余裕がなくなればなくなるほど彼等は一体観を取戻すのではないか、寧ろ長期的にはポランド化現象の社会主義は内部から崩壊すると思

う。

従って二十一世紀位になれば恐らく中国でも期待されるようにやはりコミュニズムは駄目だという時代が来るだろうと私は確信している。しかしそこまで行くにはまだまだ中国もこれから漸く毛沢東時代を脱して、もう一度共産主義者による再編成をしようとする時代であるから、早急にそれを期待することは無理であって、いわばコミュニストが最後の悪足掻きをする時代がこれから今世紀末にかけ進んでいくと思う。そしてより成熟した社会主義国家からだんだん離脱し、つまり時計がもう一度繰り返して逆の方向に回っていくであろうと、そして二十一世紀頃になればマルキシズムは十九世紀の思想として思想史のテーマにすぎなくなるかも知れない。現実の二十世紀の国民国家という体験を経て、結局は無理であったというところに行きつくであろうと思う。それを今直ぐ中国に二重享しに期待してみても無理であり、友好々々だけで考えていってよいかという問題があるのではないかと考える次第である。(昭和五七・一二・一七講演要旨)

滴 二〇世紀末までに

点 工農業生産四倍化は可能か

中国は二〇〇〇年に対する遠大な規画を立てて①、工農業総生産額を一九八一年の四倍—二兆八千億元に到達させる。②一九八二年から二〇世紀末までに工農業生産額の増加率を年平均百分の七・二に到達させる。③人口は十二億以内に抑制する。一九八二年以後の人口増加量を一億九千万以内に抑制、年平均一千三十七万の増加を可能とし、人口の自然増加率を年平均百分の九・五とする、という包括的目標を提起しているが、本世紀末までに工農業生産の四倍化を実現し、国民所得を平均一千ドルとし得るか否かについては多くの人が楽観視しているようだけれども、これに懐疑的な一部の経済学者もいる。最近北京の月刊誌「経済研究」に経済学者呉敬璉が論文を発表し、「一九五三年から八一年までの工農業総生産額は毎年百分の八・一増加したが、その裏面には水増しが多いので、今後十八年の平均増加率と比較することはできない」と指摘している。事実八二年の工農業生産は僅かに百分の四・五前後増加しただけであるところからみても、今後十八年間、毎年平均七・二%増加することは困難のようである。(広瀬)